

板垣俊一編

◇怒江が流れる地域は、下図の○印のあたり。ここはインドのベンガル湾の方面から押される地殻の力が四川省の大地に阻まれて、地表の大きなシワになった部分である。ほぼ南北に横断山脈が走り深い峡谷が形成されていて、怒江・瀾滄江・金沙江という大河が流れていることから、三江並流地帯と呼ばれている。怒江はミャンマーに下ってサルウィン川となり、瀾滄江はラオス・カンボジアに流れ下ってメコン川となり、金沙江は中国を東に流れて長江の大河となる。

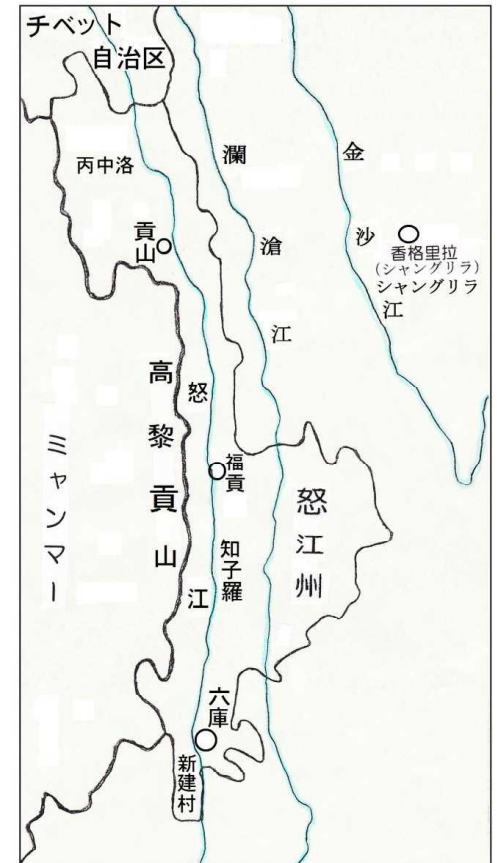
三江並流地勢図



三江並流自然博物館展示パネル



右の地図の○部分拡大図



◇大理市から六庫の町へ

途中の田園風景



雨が降ると山の土砂が流出し濁流となる
この川は怒江に至る途中で通った瀾滄江だったと思う



怒江に掛かる橋から見た六庫の町

怒江の左岸にある六庫は、人口6万人程度で、怒江流域の、川幅が数百メートルしかない狭い峡谷の片側に開けた細長い都市で、怒江リス族自治州の州府になっている。



六庫のメインストリート



六庫の市場にて

六庫の市場にて（豆腐の一切れが大きい）



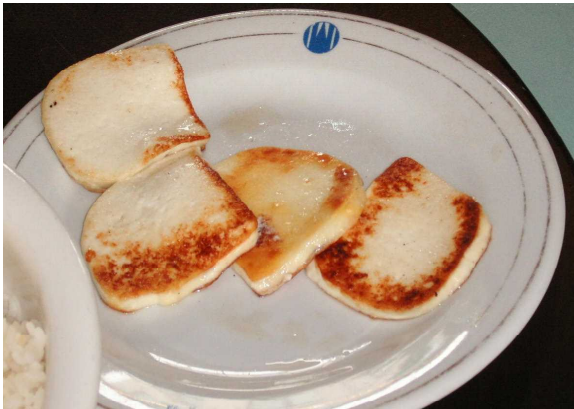
（ショウガ・ニラ・大根・ニンニク）



民族衣装を着たリス族の少女



豆腐の調理例（薄く切って炒めてある）



山間地の昆虫食（蜂の子）



リス族の男性が持っていた弦楽器（ビワ）

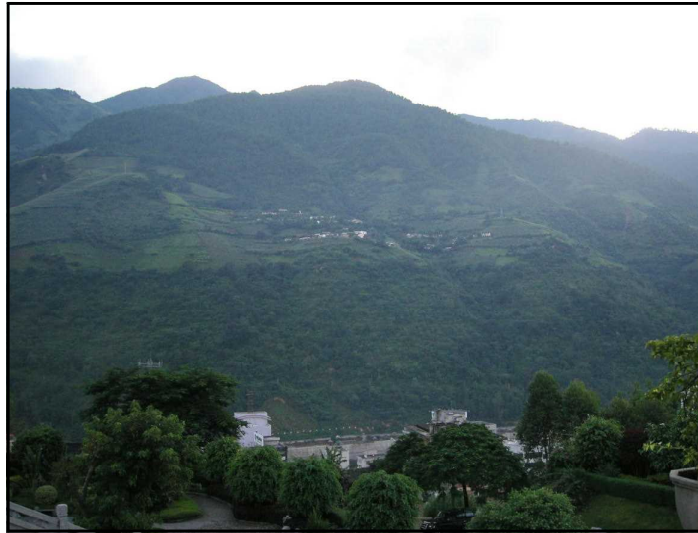


◇新建村訪問 はじめに掲げた三江並流地域の部分拡大図を見て分かるように新建村は怒江をはさんだ六庫の対岸の南よりにある。ここはミャンマー（旧ビルマ）との国境にあり、かつて第二次世界大戦の時代に、ベトナム、ミャンマーまで戦線を拡大した旧日本軍が、連合軍の反撃にあつて退却するとき、敵に情報が漏れないようにと、この村の人々を虐殺したという。その後、村人たちが新たに建てた村が、その名のと通りの「新建村」になっている。住民はリス族。

村の入口で迎える人々



怒江の山の中腹にたたずむ集落が遠くに見える



リス族の男の子たち



この調査旅行は、怒江州政府の全面的な協力によって行なわれた。州政府の目的は「ここに集まった学者たちが、怒江の自然と文化を世界に紹介してほしい」ということであった。この写真集はその依頼を遅まきながら果たした一例である。

怒江流域では至る所にカトリック教会を目にする。怒江州政府宗教局の人から聞いた話によれば、リス族のキリスト教信者は現在8万5千人もいるという。キリスト教は、この地に20世紀の前半に入り、その後、またたく間に広がったらしい。多くはカトリックの信者だという。我々を歓迎するために開かれた「民族民間文芸晚会」の舞台で村人が歌った歌は、なんと賛美歌の「きよしこの夜」であり、スコットランド民謡「蛍の光」の混声合唱だった。

新建村の教会





食卓に並べられた料理

トウモロコシ粥
包谷稀飯 (パオクーシーファン)



村のある家庭の庭先で歓迎の食事をした。この家庭は 101 歳のお婆さんを含む、4 世代 15 人だという。食材のなかでは、ジャガイモ、カボチャ、トウモロコシなどが目立つ。山の耕作地が斜面になっているため稲作が可能な土地は少ない。米飯は貴重なものと思われ、右上の写真は野菜を混ぜたトウモロコシ粥である。怒江流域ではお酒もトウモロコシで造る。



見送りしてくれた家族



◇上流の福貢方面へ

六庫から北へ、チベット自治区方面には、怒江の岸に沿って自動車が通れる道路が走っている。私たち学会員はマイクロバスに乗ってその道を北上した。福貢に至る途中、怒江の川端から 1,000 m も登ったかと思われる山の上に知子羅という集落があった。

次の 2 枚は、そこから怒江を見下ろした写真である。怒江が深い峡谷を造っていることがよく分かる。右の写真は川の向こう側を撮ったものであるが、山の斜面に少数民族が住む集落と耕地が見える。彼らはたいへん厳しい自然条件のなかに暮らしている。



この厳しい自然の中でも稲作が可能な土地にはわずかの水田を営んでいる。

←写真左は知子羅の中腹にあった水田。上の方にはトウモロコシ畑が見える。

写真右は怒江の川岸に作られている水田。稲がそろそろ黄色に色づいていた。→

この地にはタイ族もいるが、水田耕作が可能な土地はタイ族が多く占めている。



福貢での晩餐会に出た料理



リス族の共産党幹部の女性の話では、米飯を食べるときは箸を使わず直接手で食べた、ということであった。この食卓でもわれわれはご飯を手で食べた。

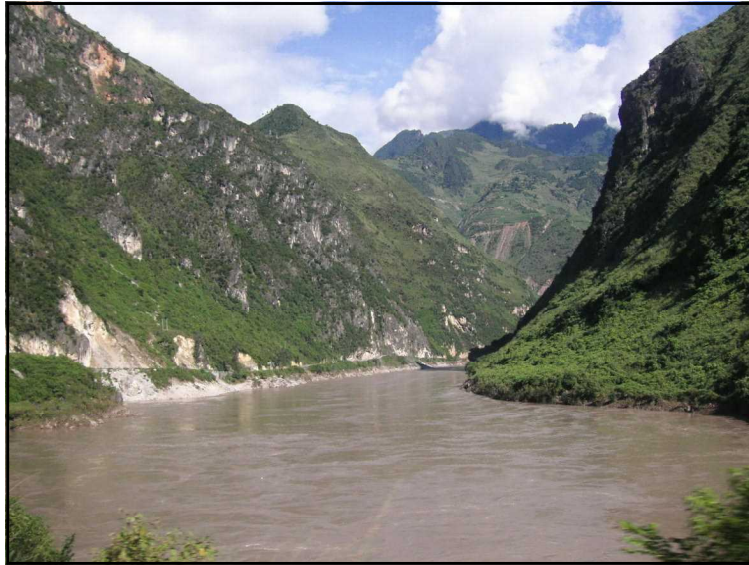


リス族やヌー族が暮らす怒江流域は、平地が少なくほとんど急峻な土地であるから、家もまた斜面に建てられ、土台に当たる部分は、片側を長い柱で支えることになるから、災害には弱いと思われる。

右の写真は知子羅の小学校で出会ったヌー族（怒族）の男の子たち。→
子どもたちがはしゃいでいたが、そのうちの一人がおでこを打って血を流していた。それを見た別の子が、草の葉を取ってきてキズに当てていた。その草が何かは知らないが、貧しい山村に生きる彼らは、子どものうちから薬草の知識を持っているのであろう。
怒江流域の民族はリス族が優勢で、ヌー族は相対的に少ない。
耕作のほかに、急斜面で牛を飼い、山羊や鶏を飼って生活している。
リス族の共産党幹部の女性は、怒江州の大きな問題は経済的な遅れによる貧困問題であり、中国中央政府は他の地域よりも多い年間7.5億元をこの地に補助しているという。怒江流域にはこれといった産業が無く、農業と公共事業が人々の暮らしを支えている。



◇怒江をさらに遡って



川岸に自動車を通れるほどの道路が走っている

怒江の流れは、雨が多い夏には濁流となる。一度この川に落ちたら恐らくミャンマーに至るまで岸に上がることはできないと思われるくらいの急流であった。貢山からさらに上流へと進むと、道は川岸から離れ、次第に高いところを走るようになる。

じつは写真右上の流れは、右のように大きく湾流した部分の下流に当たる。ここが怒江第一湾と呼ばれる景勝地である。このあたりの道路は狭く急峻な山の片側にあつて、乗っけていても、ひやひやするようなどころである。



貢山の上流で、怒江はかなり下に見える



◇桃源郷、丙中洛へ

急斜面の危うい道路を進み、怒江第一湾の景勝地を過ぎてしばらく行くと、突然、目の前に広々とした風景が現われる。



怒江下流に比べると平坦な台地になっていて、耕地が広がっている。ここが怒江州の最北端の町、丙中洛であった。ここもまたシャングリラ（リス語で、もう一度来て下さい、という意味）である。



写真の奥に見える高山の向こうはチベット高原



われわれを歓迎する女性たち。チベット族、リス族、ヌー族、トールン族などの民族衣装を着ている。



チベット族の人たちの歓迎の演奏。弦をこする二胡の形をした大きめの楽器を使っている。

この地の生活文化

日本でも行なわれた居座機 (いざりばた)



囲炉裏



縦杵と臼を使った製粉



石臼を使った製粉



ソバで作ったパン (囲炉裏で焼いたもの)



◇その他

貢山のあたりに、怒江の支流、独竜江が合流している。この川の上流に住む少数民族が独竜族（トールン族）である。そこへ行くには貢山から丙中洛とは別の道を行かなければならない。独竜江公路は1990年代後半に完成したばかりで、ほとんど秘境だった。半年間は雪に閉ざされて交通もままならぬその地に、中央政府は、馬に生活物資をつんだキャラバンを送って援助する事業を今世紀のはじめまで、40年間続けてきた。その最後の年の記録がCD2枚に収録されている。



独竜江



独竜江国道の案内板（貢山）



独竜族に物資を運ぶキャラバンの記録
（「最後の馬帮」四川電子音像出版中心）

丙中洛近くの地層は板状に薄く剥落する岩石でできている。粘板岩（スレート）というのだろうか。これを剥ぎ取って屋根瓦に利用している。



粘板岩？の地層



家の横に採取された瓦状の石が大量にあった。
（丙中洛にて）